

目指せ！「若者の楽園」モデル

■取組の概要、経緯

不登校、ひきこもり、発達障害等、生きづらさを抱える若者が全国から集うシェアハウスを運営する傍ら、「美作市ひきこもり等若年者就労支援事業」を受託し、支援者間のネットワーク会議（美作市社協、美作市保健師、岡山県民局保健師、市教委、SC、SSW、その他民間支援機関を含む）を主催、支援者の支援力アップ、支援環境改善、支援資源の洗い出し、不足支援資源の企画・実施、地域住民向けの啓蒙活動として広報誌でのコラム連載、地区社協や民生委員会などの会議における研修会のコーディネートなどを実施しています。さらに生きづらさを抱える若者の体験機会・就労機会として、地域企業・団体・個人約 100 社と連携しています。

■基本情報

○官民連携事例

○取組の実施機関：特定非営利活動法人山村エンタープライズ

- ・対象地域：岡山県美作市、全国
- ・連携の実施機関：

美作市（事業委託元、シェアハウス事業後援、ネットワーク会議連携）、美作市社会福祉協議会（ネットワーク会議連携、居場所・家族会共同開催、体験活動企画・実施連携、地域啓発活動連携）、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー（ネットワーク会議連携）、特定非営利活動法人むすびこぶ（ネットワーク会議連携、居場所・家族会共同開催）、美作市教育委員会（ネットワーク会議連携）、岡山県民局保健所（ネットワーク会議連携）、ホテル作州武蔵（就労支援連携）、作東バレンタインホテル（就労支援連携）、安藤農園（就労支援連携、体験活動実施連携）、TANABE FARM（就労支援連携）、特別養護老人ホーム みまさか園（就労支援連携、体験活動実施連携）、イーストマスター秀地（就労支援連携、体験活動実施連携）、アグリライン橋本（就労支援連携、体験活動実施連携）、有限会社内海製作所（就労支援連携）、にんにんホーススクール（就労支援連携、体験活動実施連携）、教福寺（体験活動実施連携）、霊山寺（体験活動実施連携）、YOSHI YOGA（体験活動実施連携）、他協力企業多数

○取組の実施期間：2016 年 4 月～現在

○対象者のライフステージ区分：

子ども～就学前、高校生、大学生、大人、若年層（中卒・学業中退者 18 歳～34 歳）、
中年層（35 歳～64 歳）

○URL：<https://hito.sanson.asia/>

■課題や苦労した点

「美作市ひきこもり等若年者就労支援事業」は企業版ふるさと納税を財源とする市の単独事業のため、限られた予算の中で、連携事業者たちの手弁当で企画を実施しなければならないことです。また企業・団体との就労支援連携では、企業側に負担をかけることも多く、ただでさえ経済状況が芳しくない中で、その部分にリソースを割くことには必ずしも前向きでない場合、企業経営者の啓蒙だけでなく、末端の現場担当者にも理解を醸成する必要があることです。

■取り組みの効果

約10年のシェアハウス運営を通じて、入居者108名、卒業者90名です。そのうち20名が美作市内にとどまり、一人暮らしをしています。つまり全国から集った若者の25%がそのまま地域にとどまって生活していることになります。若者が流出し、高齢化の一途をたどる中山間地域において、若者人口増加の一助となると同時に、高齢化による人手不足に苦しむ地域企業にとっても、若い働き手を確保することができ、生きづらさを抱える若者と地域企業との間にWIN-WINの関係ができつつあります。また、それら若者たちが地域にとどまる選択をしたことには、支援者間のネットワーク会議などを通じて形成された地域の理解（地域向け広報、啓蒙活動）や包摂（居場所活動、地域での体験活動）もまた、大きな役割を果たしています。

■取材をして

「何もしない」をがんばる ～若者の楽園というチャレンジ～

「大きな声で笑うところ」と、元入居者の里美さん（仮名）は答えた。
私が「ここに来てよかったことは？」と尋ねた。彼女は「能登さんに会ったこと」と答えた。
私は重ねて「能登さんのどこがいいの？」と尋ねた。彼女は、少し考えてから、そう言った。
傍でそのやりとりを聞いていた能登さんは、大きな声で笑った。これのことだ。たしかに能登さんの笑い声は大きい。

里美さんの答えは、はぐらかしたものだっただけかもしれない。たしかに、突然現れた知らないおじさん（私のこと）に矢継ぎ早に質問されたら、戸惑ってあたりまえだ。「優しくて親身になってくれるところ」などといった、ありがちで優等生的なものではない回答を…とあわてて考えた結果、とっさに口に出たのが「大きな声で笑う」だったようにも聞こえた。その意味では、やりとりとしては「軽い」ものだっただけかもしれない。

しかし、取材を終えての帰り道、私は「案外、あの答えに尽きるかもしれないな」と考える

ようになっていた。そのわけをうまく伝えようとする、それがこの文章の目的である。

岡山県美作市田殿（たどの）地区。人口 23,000 人の美作市の、世帯数 200 程度のその地区に NPO 法人山村エンタープライズが運営する「ひきこもり支援の「人おこしシェアハウス」」はある。岡山駅から JR 津山線で 1 時間ちょっと北上して終点の津山駅へ。そこから車で 40 分程度の中山間地だ。

シェアハウスは四の谷川沿いに走る県道脇に建っている。川が「底」になっていて、一段高いところに畑作地、また一段高いところに県道、さらに一段高いところにシェアハウス、その裏手は山、という構造だ。なだらかながらも山肌が川に迫る中、川沿いのわずかな低地に畑をつくり、道を通し、傾斜を削ってシェアハウスを建てている。典型的な中山間地の風景だ。裏手の山にはゴルフ場があり、シェアハウスはもともとはそのゴルフ場の社員寮だった。周囲に民家はない。



（シェアハウス全景。NPO 法人山村エンタープライズ提供。以下同じ）

建物は 3 棟。二階建てが男性寮で、平屋が女性寮、そしてコンテナが事務棟だ。私が訪れたとき、男性寮と事務棟の間の屋外スペースで、数人が焚き火の周りに集まっていた。暖をとっているのかと思ったら、土鍋を火にかけていた。火を見つめて、誰もしゃべっていない。まったりした雰囲気だ。みんな若い。何をしているんだろう？と思ったが、いきなりは聞けない。まずは「能登さん、おられますか？」と声をかける。

能登大次さんは、NPO 法人山村エンタープライズの代表だ。雰囲気がやわらかい。施設内を案内してもらいながら、運営についてのもろもろを聞く（冒頭の里美さんは、この施設案

内の際、たまたまりビングにいたので、私につかまっていまい「質問攻め」にあった)。



(写真真ん中が能登さん)

シェアハウスは、「ひきこもり支援の「人おこしシェアハウス」」をキャッチフレーズにしている。「地域おこし」はよく聞かすが、「人おこし」はあまり聞かない。

山村エンタープライズのホームページでは、次のように説明されている。

人おこしは、「学校に行けていない」「ひきこもっている」「コミュニケーションが苦手」など、生きづらさを抱える若者たちが全国から集い、社会的自立をめざすシェアハウスです。

シェアハウスを開設した当初（2012 年）は「地域おこし」のつもりだった。少子高齢化と過疎に悩む地域に、人を呼び込み、にぎわいを生み出す。そのためのシェアハウスであり、能登さんもそのために「地域おこし協力隊」として美作に移住した。能登さんはデザイナー。福祉職のバックグラウンドはない。

しかし、やってみると、「ひきこもり」と言われる若者が集まった。しばらくして、自分たちのやっていることは、むしろ「人おこし」とでも言うべきものだ気づいた。そこで 2016 年から「人おこし」と謳い出した。

その経緯を、ホームページはこのように綴る。

「人おこし」の母体になったのは、限界集落の地域活性化を目指し 2012 年に立ち上げた「山村シェアハウス」。

そこで私たちが目にしたのは、やってきた若者たちが大自然の中で、そして地域の活動を通じて、どんどん元気になり、成長し、羽ばたいていく姿でした。

「田舎には若者を元気にする力がある！」私たちは確信しました。

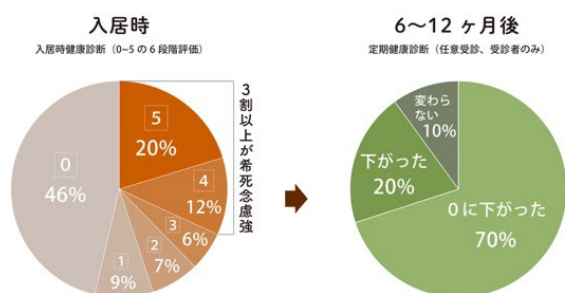
――

入居者は全国から来ている。2016 年に「人おこしシェアハウス」と名乗り始めてからの 9 年間で 108 人。

入居前、家族と「不和」だった人が 25%。入居時の希死念慮は、医師による 0～5 の 6 段

階評価で、希死念慮が「強い」と言える5と4の人が3分の1に達する。状態のよろしくない若者が多い。

しかし多くの若者が、ここで暮らす中で状態がよくなっていく。その率9割。加えて、シェアハウス退所後も、地元に戻らず、周辺にアパートを借りるなどして暮らし続ける人たちが20名に上る。期せずして、この地域の人口減対策にもなっており、美作市役所の担当者もその点を評価している。



(入居者の状態。入居時と6-12ヶ月後)

ちなみに、里美さんは関東で実家暮らしをしていた。ネットで「シェアハウス ひきこもり」で検索したところ、ここがヒットして、自分で応募。「なんとなく楽しそう」と思ったらしい。たしかに山村エンタープライズのホームページには、あまり「支援臭」が漂っていない。デザイナーという能登さんのバックグラウンドが影響しているのかもしれない。

里美さんは、一年程度シェアハウスで暮らしてから「卒業」し、今は近くで一人暮らしをしている。実家にいたときの「ごきげんな度合い (ウェルビーイング度)」を10段階で答えてもらったら「2」だったそうだ。「今は？」と聞くと、なんと「10」とのこと！

最近やったアルバイトは、地域の農家さんから頼まれた栗拾いで、私が訪れたときはシェアハウスの動画を編集する仕事を請けていた。こうしてアルバイトをつないで暮らしているようだ。ちなみに、能登さんとランチで訪れた食事処でも、入居者がアルバイトしていた。雇用やアルバイトで生計を立てている人もいれば、ちょこちょこアルバイトしながら、不足分を実家からの仕送りでまかなっている人もいるそうだ。

さて、では何をしたら、状態のよろしくない、ひきこもりの若者たちが元気になっていくのか。

ホームページを見れば、たしかに「一通りのこと」は書いてある。「生活」としては、9 時の朝活に始まり、午前の活動、昼の料理当番、午後の活動…と一日のメニューがあり、「活動」としては、菜園、DIY、パソコン教室、スポーツ、音楽活動…と多彩なプログラムが並ぶ。地域おこしから始まった取組みでもあり、地域の人たちとの共同活動にも力を入れているようだ。

これらはすべて重要だ。たしかに重要なのだが…「ふつう」だ。若者の自立支援を謳っているところならば、多くの事業所がやっている。これで状態のよろしくない若者がみんな元気になるなら、苦労はない。他にはないのか。何か特別なことは…？

あった。というか、なかった。

というか、「なかった」ということが「あった」。

――

私が訪れたときに火にかかっていた土鍋。あれの中身は、結局ただの水だった。お湯を沸かしていたのだ。そのお湯で、蜜蝋を溶かす（湯煎する）のだと言う。

蜜蝋とは、古来珍重されていたミツバチの巣から採れる天然ワックスのこと。写真のようにになっているものを何度も溶かし、濾して、純度を高めていくらしい。写真のようになるまでにもいろんな工程があったのだろうが、それは聞かなかった。蜜蝋の工程が重要なわけではないので、お許しを。



ここで言及したいのは、そのときのその場の雰囲気だ。

家庭用の土鍋に、ボウルに入れた蜜蝋を、わりばしを使って湯煎する。その作業をスタッフらしき人が行っている。「これでいいのかなあ」などと言いながらやっている。遊びで、よくわからないけど、やってみたかったのでやってます、という雰囲気だ。他の人たちは、ただ黙ってそれを見ている。たまに、「誰かそれ取って」とか言われると、誰かがそれを取って渡す。

そのうち、誰かがアルミの包みを持ってきた。焼き芋ができたそう。少し離れたところでも焚き火をやっていた。「食べる？」とも「食べなよ」とも言われない。ポンと置かれたアルミを、誰からともなく手を伸ばして、思い思いにつまんで食べる。私も食べた。ねっとり系のおいしい焼き芋だった。

これが「活動」。そして能登さんは、大きな声でよく笑っているだけ…。拍子抜けするほど、「それらしいこと」を何もしていないのだ。

入居者の中には、昼夜逆転している人もいれば、ゲーム漬けになってしまっている人もいるだろう。それに対しても、ここでは「何もしない」らしい。朝起こすとか、ゲーム時間を制限するとか、いわゆる生活指導的なことを何もしない。

「そのうち、自然と朝起きるようになるし、ゲームもほどほどになっていくんですね」と能登さんは笑う。

特別なことはなかった。むしろ「しない」ことのほうにこだわっている。しかし、この「なかった」ということが実は特別だ。その意味では特別なことはあった。だから「なかったということがあった」。

(誤解のないように言うと、もちろんだんなときにも何もしないわけではなく、シェアハウスにはかかりつけの専門医も、福祉専門職もいる。急性期の医療・福祉対応は、しっかり行われている)

――

こういう施設を運営する人で、ルールを作りたいと思う人はいない。誰もが「管理型ではない施設づくり」を目指す。しかし、それは簡単ではない。なんだかんだとトラブルは起こるからだ。

トラブルが起これば、また起こらないようにしよう、と誰かが何かを提案する。その中には、何かしらのルールをつくろうという提案もある。それを入居者自身が求める、スタッフが求める、入居者の家族が求める。対応しないと、「何もしないんですか」「何もしてくれないんですか」と責められることもある。ルールはそうやってできて、だんだんと増えていく。ルールを増やしたくて増やす人はいない。ルールは増えていってしまうものだ。

ルールがあることを一概に「よくないこと」と言うつもりはない。人がそこに暮らしていれば、しかも複数の人が寝起きしていれば、必ずトラブルは起こる。最低限のルールは必要だろう。

しかしルールは、必ず破る人を生み出す。故意であれ過失であれ、線を引けば必ずその線を越える人は出てくる。人は生きて動いているからだ。そのとき、どうしてもその人に対する視線はきつくなる。「みんなが気持ちよく暮らしていくためのルール」が「誰かの肩身を狭くする」ものになってしまうことがある。どうする？

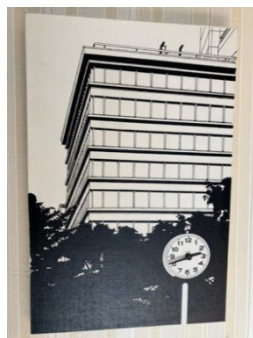
たぶん、この「どうする？」に直面する中で、もともと大きかったらしい能登さんの笑い声はさらに大きくなっていったのではないかと思う。

能登さんの笑いには、意思の名残がある。意識して大きく笑う場面もあったはずだ。「なんとかなるよ」と言う代わりに。それだけではない。それでうやむやにしてきたことも、ごまかしてきたこともあっただろう。相手を黙らせたこともあったかもしれない。

しかしそれで、放っておくと増えていってしまうルールの肥大化を押し留めてきたのではないかと思う。それで救われた人もいただろう。そうした日々の運営、その積み重ねの中で、能登さんの笑いはさらに大きく、そして自然になっていったのではないか。かすかな意思の名残をとどめて。

――

私がそう思ったのは、半日能登さんと過ごし、入居者やスタッフの人たちの様子、またその人たちと能登さんの関わり方を見させてもらったからだが、実はもう一つ、「ダメ押し」があった。



この絵が、事務所に飾られていた。

取材も終わりというとき、「そろそろお暇する時間かも」と、私が時計を探して事務所内を見回していた、能登さんがこの絵を見た。モノクロ写真にも見えるような、シンプルですっきりしたアートだが、実はこれ、時計の針だけが動き、時計としての機能を果たす。2時40分だった。

いわゆるトリックアートだ。デザイナーとしての能登さんの作品だという――それが、私にとっては「ダメ押し」だった。

トリックアートを作るような人は、ユーモアのセンスがあってウィットに富んでいるが、大声で笑うような人ではない。どちらかというと、自分で笑うよりも他人をクスリとさせるのが好きな人、という先入見が私にはある。エッシャーも福田繁雄も、そのような人だったと聞く。

デザイナーとして生計を立てていた時代、能登さんとはたしかにそういう人ではなかったか。その面影は今でも彼に残っているように思う。同時に、彼は今、大きな声で笑う人でもある。その作品は、彼がさらに大きな声で笑う人になったことを示唆していた。

———

だからたぶん、大事なのはプロセスである。

大声で笑っていれば、「人おこしシェアハウス」のような実績をどこでも出せるかと言えば、そうではないだろう。里美さんも、大声で笑う人なら誰でもいいわけではないだろう。むしろ一般的には「うざい」はずだ。

その意味では、大切なのは、能登さんの大きな笑いにかすかに残る、意思の名残であるとも言える。その意思の名残は、彼の自己変容のプロセスの痕跡だ。

能登さんの笑いは、自分も最初からこうだったわけではない、ここで過ごす中で変わってきたのだ、という暗黙のメッセージを相手に伝える。それはこの場所にはその力があるのだということ、人は変わることができるのだということを、深いところで納得させる力を持つ。論より証拠、私を見よ、というわけだ。能登さんの笑いは、メッセージである。

そして入居者の人たちは、笑うことが簡単ではないことを誰よりもよく知っている人たちだ。このメッセージを、それにふさわしい深度で受け取ることに、この人たち以上に長けた人はいない。

このシェアハウスの類稀な成果は、このようにして生まれているのではないか、と私は感じた。

———

能登さんは今、「若者の楽園」というコンセプトを打ち出している。

「人おこし」からさらに進んで、今度は「楽園」と来た。さらに攻めようとしている。背景には、入居希望者が増えて、全員を受け入れられなくなっていること、多方面から「ここみたい場所を他にもつくってほしい」と頼まれること、などがある。たしかに、こんな場所が全国にあったら、本当にすばらしいだろう。

さて…と、その上で、私は考える。

2 拠点目、3 拠点目を作るとして、生活スケジュールや活動プログラムは移植することができる。それは難しくない。経営的な収支計画も、運営マニュアルも作れるだろう。

しかし、特別なことをしないという特別は？ 大きな笑いというメッセージは？ これは移植できない。「こういうときには、大きな声で笑ってみよう」などというマニュアルは、悪い冗談でしかない（笑）。

ここで暮らす中で自分も変わってきた、この場・ここにいる人たちにはその力がある、ということを、能登さんは彼の大きな笑いによって示してきた（と私は思っている）。

それを別人が輸入することはできない。別人は、自身で変容し、それと向き合い、自分なりのやり方でそのことをメッセージとして伝えていくしかない。能登さんのマネはできないし、しても意味がない。

加えて、メッセージは「受け取られるもの」であって「伝えられるもの」ではない。言い換えれば、自分が意図したようには伝えられない。意図しないものが受け取られる。能登さんの「名残」のように。

人は、自分の背中しか見せられない。自分から見えていて、自分が意識しコントロールできる表（腹）部分は、たいして伝わらない。相手が受け取るのは、自分からは見えない裏の部分、いわば背中である。背中からにじみ出るもの、とも言っている。だから古来、人々は「背中を見せる」と言ってきた。あれは、単なる昭和の根性論ではない。

結局、問われるのは、その人自身の人格・人柄である。それが伝わってしまう。だとしたら、2 拠点目 3 拠点目はどうしたらうまくいくだろうか？ 「いい人」を採用すること？ いい人って誰だ？ いろんなことと向き合い、その結果変容し、それが背中からにじみ出る。誰だってそうだ。人生とはそういうものだ。じゃあ誰でもいいのか？ たぶんそうではない。では育成は？ そういう人は育てられるのか？ 育てられるとしたら、何をすれば「育つ」のか？ 何を見ればわかるのか？ どこにヒントがあるのか？ 企業の人材開発プログラム？ 子育て本？ いったいかつて、思い通りに人を育てられた人など、いるのか？…

これはチャレンジである。「若者の楽園」というコンセプト並みのチャレンジである。

そしてこのチャレンジは、山村エンタープライズだけのチャレンジではない。同じ課題をすべての分野が抱えている。だからこれは、私たちのすべて、私たちの社会にとってのチャレンジである。

さて、どうする？

（取材者 湯浅誠）